

## 三字熟語⑧断捨離

企業経営漫談士 岡野実空

今世紀に入り、一躍脚光を浴びるようになった三字熟語、「断捨離」。それまでヨガの健康法に使用されていた三文字が、私たちに身近な「片づけ」のコンセプトとして転用され、一気に世に広まりました。ここではそれを「情報」や「経営」に適用し、そのポイントを考えます。

### その1: 本義

「断捨離」とは、 unnecessaryなものの入りを「断ち」、不要なものを「捨て」、最終的にものへの執着から「離れる」こと。元々は心身の統一を図り、瞑想の境地に入って解脱を得る、古代インドの修行法の基本で、先の続編(Z-28)で取り上げた、『三毒』(貪瞋痴)がその対象です。

それがいつしかヨガの健康法の、近年は「片付け」の基本的な考え方に転用されて世に広がり、いまや世界に知られるまでになりました。

### その2: 「情報」への適用

今回まず取り上げるのは、「情報」の「断捨離」。しかし職業人としての人生を「前・中・後」の3期で考えれば、「前期」はそれと無縁の時期。目指す「専門性」を高めるために「情報」を蓄積する一方、他分野の読書などをつうじ「知識」の「幅」を広げ、自分の活動や体験を絡めて、職業人としての基礎を作る時期だからです。

また次なる「中期」は、その基礎の上に確たる「専門性」の柱を立て、それに関係しない分野の「断捨離」を開始する時期です。但しそれは、条件付きであることに要注意。後に必要となったとき、手放した分野の「知識」の入手先を確認できていなければなりません。そして以上から生まれた余力を注ぐのは、もう一本の柱となる「専門性」。それまでの経験を絡めて構築する次なる柱は、古い柱の陳腐化というリスクを回避してくれます。

それが上手く立ち上がったら、「断捨離」はいよいよ「後期」に入ります。そのねらいは、複数の「専門性」の相乗効果としての「知恵」や「コンセプト」の創出。もしそれが「次元」の高いものであれば、そこに他人の柱が加わり、社会への貢献度の高い業務や事業につながるのです。

長寿社会を背景に、職業人としての「二毛作」が必然となったいま、「情報」や「知識」の「断捨離」は、そのために欠かせないものとなりました。

#### ☞ 「三々な経営」

E-4 「事業構造再編成」の難しさを考える

#### ☞ 続「三々な経営」

Z-06 「事業撤退」の意義

Z-28 「三〇」熟語⑧三毒

### その3: 「経営」への適用

さて「経営」の分野において、早くから「断捨離」を提唱していたのは、彼のドラッカー。泰斗曰く、「イノベーションの戦略の一步は、古いもの、死につくもの、陳腐化したものを、計画的かつ体系的に捨てることである」。「まず捨ててこそ、新しいものを生み出すことができる」という鉄則です。

またその阻害要因は、「成長」という呪縛。それに囚われて新しいことばかりを考えてしまい、肝心の「断捨離」が「始点」ではなく、「後始末」になってしまうからです。それを防ぐ処方箋は、「変化ではなく沈滞に対して抵抗する組織を作ること」。「来たるべき時代はイノベーションの時代」という泰斗の予言の正しさを、すべての人が実感するいま、生き残りを目指すあらゆる組織は、まず業務や事業の「断捨離」から始めなければなりません。

今回の最後は、ここ数年の経営本「断捨離」報告です。その前に再読すると、忘れていた内容を思い出すことはあっても、新たな「気づき」が得られる図書は滅多にありません。しかし一部の例外からは、想定外の「発見」があり、結局じっくり読み直して本棚に逆戻り。その例外中の例外こそ、今回もご登場いただいたドラッカーの著作群。それは過去40年、涸れることのない「気づき」の泉でした。

そして改めて確認したのは、上記と同時に始めた我が日課の意味。それは泰斗の著作群のミドル向け「脚注」作りでした。

2021年9月13日 実空